

崇貞学園・桜美林学園と清水安三

太田哲男

桜美林学園・桜美林大学の創設者である清水安三(1891-1988)という人物についてお話ししたいと思います。清水安三は、1891年に滋賀県の、現在の高島市に生まれました。高島市は、陽明学者である中江藤樹の生まれたところでもあり、清水は中江藤樹を尊敬していましたが、膳所中学時代にキリスト教に接して洗礼を受け、膳所中学卒業後の1910年に同志社に進みました。同志社といいますが、1843年生まれの新島襄は、1890年つまり清水の生まれた年の前年に亡くなっていますから、清水は新島を直接には知らない。清水はむろん新島を敬愛してはいましたが、直接に接したのは、宮川経輝や原田助などのような新島の教えを受けた面々です。彼らは組合教会(congregational)に連なる熊本バンドの呼び手でした。原田助は、清水が同志社在学中に社長(学長)をしていた人物で、1922年にハワイ大学東洋学部を創設しました。

清水安三がごく幼いころ日清戦争がありました。清水は、中国を蔑視するような歌詞の歌が歌われていたことを覚えていると述べています。その後、1910年に韓国併合があり、組合教会は朝鮮総督府から資金援助を受けて朝鮮伝道に乗り出します。朝鮮伝道部を作り、渡瀬常吉をその「主任」として派遣しました¹⁾。1918年7月に朝鮮軍司令官になった宇都宮太郎の日記²⁾が残っていますが、その日記を見ますと、渡瀬がしばしば宇都宮に会っており、総督府との関わりの深さが判明します。渡瀬は徳富蘇峰の大江義塾に学んだ人物で、のちに『海老名弾正先生』という伝記を書いています。

蘇峰は、1910年に寺内正毅朝鮮総督の要請に応じて『京城日報』の監督となり、これを1918年まで努めていますから、やはり朝鮮総督府の協力者です。

しかし、組合教会の系列のなかには、柏木義円・湯浅治郎(新島襄没後に同志社の理事として経営に参画した人物。ICUの初代学長だった湯浅治郎の父親)などという人もいて、彼らは組合教会が朝鮮総督府につながることをきびしく批判していました。吉野作造も、この点では柏木たちと共同歩調をとっていました³⁾。清水は、おそらく柏木たちの批判に共感するところがあったのだろうと私は推測しています。

清水安三は、1917年、まだ第一次世界大戦のさなかに、組合教会から満州・奉天(現在の瀋陽)に派遣されました。まだ牧師見習いでした。清水は満州で、満州にいる日本人に伝

道することを求められていたのですが、清水は中国人あるいは満州人への伝道をめざしていたので、満州から北京に移ります。それが1919年3月、ちょうど朝鮮で三一独立運動が起こり、まもなく北京で五四運動が起ころうという時期でした。

清水は翌20年初めに五四運動についての見聞を『大正日日新聞』に書きました⁴⁾。この記事が吉野作造の目にとまり、吉野との接点が生まれました。吉野は、五四運動のあと、吉野の天津時代、北洋法政専門学堂での教え子のひとりでのちに中国共産党の創設者の一人となる李大釗^{りだいしょう}——当時は北京大学教授でした——をおそらくは仲立ちとして、日中の大学の、といいましても実際は東京帝大と北京大学ということですが、教員と学生の交流をめざしました。しかし、この企ては19年には実現しませんでした。北京にいた清水は、吉野作造のこの計画を引き継ぐような形で、翌20年の春に、中国の教授・学生の日本訪問に道をつけることになりました。吉野作造との共同作業だったともいえます。

同じく20年の秋、中国の華北では大規模な干ばつが発生します。欧米諸国も救援活動に乗り出し、日本でも渋沢栄一をリーダーとする日華実業協会が救援活動を積極的におこなっています。清水も、渋沢に救援活動に現地で協力すると願い出て、干ばつに苦しむ農民の子どもたちを預かって世話をするという活動に取り組みます。1921年1月から半年ほどです。

この救援活動に取り組んだ結果として、清水は日華実業協会からお金を贈られます。そこで清水は、これを資金として崇貞女学校を作りました。これがのちに崇貞学園となっていくます⁵⁾。

この学校の特色は、北京の貧民街の女子児童に教育を施そうとしたところにあります。場所は北京の朝陽門外です。当時の北京は城壁で囲まれた街でしたが、その東側の城壁の一部をなす朝陽門の外側にあたります。満州人が多く住んでいたといえますから、この崇貞女学校に学んだ児童には満州人が多かったのだらうと思います。当時、清水は北京にいた魯迅と知りあいになりますが、魯迅の推薦でこの学校の教員になった羅俊英という女性は満州人でした。

朝陽門外に住む貧困な家庭の娘たちは、ある程度成長すると、売春を強いられる。清水安三と清水夫人・美穂は、そういう貧困な女子児童に簡単な読み書きと針仕事、刺繍を教えた。刺繍を教えたのは安三ではなく美穂ですが、刺繍ができれば、その製品を売ることのできる貧困家庭の女子児童もいくらかのお金を得ることができるので、彼女たちも売られずに済む。ですから、崇貞女学校は、慈善を施すための学校ということではなく、女子児童の自立を促す学校だったのです。

スラムに入り込んでその救援活動をするという点では、神戸で活動をしていた賀川豊彦の影響もあったでしょう。実際、1920年代のはじめに賀川が北京を訪問した際、清水はその住まいに賀川を泊めていますし、美穂は賀川を非常に尊敬していました⁶⁾。

このようにみえますと、清水安三夫妻が作った崇貞女学校の特色は、第一には中国人・満州人のための学校であったという点、第二には貧困からの脱却をめざすという意味で社会

事業的な学校だったという点にあります。

とはいえ、資金的には困難がありますので、夏休みなどを中心に、清水安三は日本国内で寄付金集めに奔走し、刺繍を売ることもしました。その際に、先にお話ししました日華実業協会に加わったような実業家たち、しかもキリスト教の教会関係者の寄付が大きかったといえます。

第一次世界大戦後の日中関係をどうするかについて、日本には、一方に武断的な立場があり、他方にはあくまで経済的な関係を中心にすべきだという立場があつて、渋沢栄一とか大原孫三郎は後者の立場であつたといえる。石橋湛山なども同様だと思います。つまり、北京で学校を運営していこうという清水の考えに同調する経済人が一定数存在していたということでもあります。

今、大原孫三郎のことにふれましたが、大原は岡山孤児院を作つて運営していた石井十次と密接な関係にありました。その大原は1923年4月に中国を訪問しています。この訪問の情報を得た清水は、大原の案内役をみずから買って出ました。大原はむろん中国での訪問先に関する予定を事前に組んでいたのですが、清水のプランに耳を傾け、清水に案内を依頼したのです。そのときの案内に対する大原からの返礼という意味もあつて、清水夫妻は大原からアメリカ留学のための資金4,000円を提供されました。ちなみに、吉野作造の東大の年間給与（1922年）が3,800円弱という時代です。

清水は、アメリカ留学のための資金を増やそうと、藤原鎌^{かま}兄という人物が出していた『北京週報』という雑誌に頻繁に寄稿し、中国情報を中国在住の日本人や日本国内に向かって発信していました。長谷川如是閑も、清水の中国情報に注目していた人物のひとりです。清水は北京滞在期に書いた原稿を集めた2冊の本を出版します。それが『支那新人と黎明運動』『当代支那新人物』（1924年）でして、清水のアメリカ留学の直前の出版です。吉野作造がこの本を推薦する序文を寄せています。

先ほど魯迅のことを申しましたが、北京に移つてのち、清水は魯迅とその弟である周作人とも親交をむすんでいました。それだけ中国社会に溶け込んでいたということでもあります。

さて、清水夫妻は1924年にアメリカに向かい、清水安三はオハイオ州にあるOberlin大学で2年間学ぶことになったのです。桜美林大学の桜美林という名前は、このオハイオ州にあるOberlinをもじつたものです。

当時の日米間には、日本からの移民制限をめぐる対立があつたのですが、清水の場合は既婚者にして牧師ということで、アメリカへの入国が認められました。

Oberlin大学は、早くから黒人学生の入学を認め、早くから女子学生にも門戸を開いていた大学として知られていますが、そういうことも清水に強い印象を与えました。また、美穂夫人は孤児院でアルバイトをしたとのことですが、学校のあり方や社会事業について学ぶところがあつたといえます。

1926年に清水夫妻はアメリカ留学から戻り、北京での生活に戻ります。しかし、1920年代後半には、経済不況が続き、崇貞女学校への寄付も思うにまかせないという事態に直面します。そして、33年には、協働者であった美穂夫人が病のためにこの世を去ってしまいます。

35年に清水は小泉郁子と再婚します。小泉は、清水安三夫妻の Oberlin 大学留学時代と同じく Oberlin 大学に学び、そこを卒業してミシガン大学の大学院に入学し、修士課程を終えて帰国し、青山学院女子専門部の教授になった人です。女子教育に関する著作⁷⁾を出していました。

小泉郁子と結婚した前後から、崇貞学園では『支那之友』という学園紙を刊行しました。そして、この学園紙を活用して広く寄付を募るようになります。この方式がある程度の成果をあげて、寄付が集まるようになりました⁸⁾。

寄附が集まった理由を考えますと、1937年には盧溝橋事件があり、日本は中国との全面戦争に踏みこんでいく時代。そういう時代に北京で学校を経営しているということが、軍事によらない日中関係が望ましいという国民感情を刺激した面があって、それが崇貞学園への寄付に結びついていったのだと思います。と同時に、清水は外務省からの補助金獲得の努力も精力的におこなっています。崇貞学園は日本の外にある学校だからということで、文部省ではなく、外務省の管轄の下にあったのです。

また、盧溝橋事件直前、北京にいた一部軍人の間に、蒋介石軍との武力衝突を回避しようという動きがあり、清水安三もその動きに協力して活動しました。清水はその経緯を、1939年に出版された『朝陽門外』(朝日新聞社)に書くのですが、この本がよく売れて、清水はジャーナリズムの一部から「北京の聖者」ともてはやされるようになりました。それも、崇貞学園への金銭的な寄付、いわば「貧者の一灯」を増やしていったといえるかと思えます⁹⁾。

すでにお話ししましたが、崇貞女学校はもともと中国人女子児童のための学校として始まりました。しかし、1930年代の後半になりますと、崇貞学園は日本人部を開校します。それは、日中戦争開始後になると、北京在住の日本人の数が増えて、日本人子弟の教育の問題が無視できなくなったことが背景にあるのですが、その際に注目すべきことは、朝鮮人の入学を推進したことです。日本人部を作ったといいましたが、当時は朝鮮人に対する同化政策が推進されていたから、その日本人部に朝鮮人が入学してくるわけです。そして、清水も朝鮮人を積極的に受け入れようとしていました。

そればかりか、日本の政治権力による創氏改名政策にもかかわらず、崇貞学園での清水は、朝鮮人が朝鮮人名を名乗ることを妨げませんでしたし、朝鮮人児童に朝鮮語を学習することの重要性を教えていたのです。

当時の「満洲国」には「五族協和」というスローガンがありました。漢・満・蒙・日・朝の「五族」の「協和」という話ですが、孫文の提唱した「五族共和」を意識した、あるいは

これに対抗しようとしたものでしょう。しかし、満洲国の「五族協和」はいわば神話にすぎなかった。それに対し、崇貞学園では、当初からの漢族・満州族の女子児童への教育というところから出発して、朝鮮人への教育、しかも、その自立を促すための教育をおこなうようになった。清水が崇貞学園で実践した営みは、満洲国のスローガンである「五族協和」というより、孫文の唱えた「五族共和」という理念に近いものだったといえるかもしれません。

清水は、1940年1月から6月まで、つまり日米戦争が間近に迫っている時期にアメリカに渡り、寄付金集めをしています。アメリカ人から寄付を集めたということではなく、日系移民の教会を中心に寄付を集めたのです。しかし、最初に訪問したハワイで、1937年の南京での事件、つまり虐殺事件について、これを否定しなかったために官憲の憎しみを買い、半年かかって集めた寄付金を携えて北京に戻ったとき、憲兵隊に拘束され、寄付金の半分ほどを憲兵隊にといますか政府に「寄付」するよう強要されました。しかし、同じころ、清水がかかわった「愛隣館」という北京に開設されたセツルメント事業に対し、天皇からの下賜金が与えられ、崇貞学園にも下賜金が与えられて、憲兵隊といえども、崇貞学園にあまり強圧的なことができないようになったのです。

第二次世界大戦が日本の敗北によって終わったとき、清水夫妻、ことに郁子夫人は、崇貞学園の北京での存続ということを考えていたようです。北京に入った国民党政府に対し、「残留嘆願書」を提出するとか、国民党に連なる張伯苓^{はくれい}を崇貞学園の理事長に据えるとか、いろいろ試みはしたものの、結局、北京退去を余儀なくされます。

1946年3月、清水夫妻は中国を去って山口県の仙崎港に到着しました。清水郁子は松江の出身、安三は滋賀県の出身ですが、清水夫妻は松江には向かわず、滋賀県も素通りして東京にやってきました。そして、神田付近で、清水の回想によれば偶然に賀川豊彦に出会うのです。日本に戻って何をしたいのかという賀川の問いかけに、「農村に学校と教会を建てたい」と清水は答え、賀川は「よかろう」と答えたといえます¹⁰。

賀川は当時、アメリカの占領軍と関わりができていたこともあり、片倉財閥が所有していた、そして軍に少しばかり関わりがあった寄宿舍が、横浜線の沿線、町田と八王子の間に位置する淵野辺にあると清水にもちかけた。賀川とこの寄宿舍を見に行ったら清水は、ただちにここを学校にしようと考えたのです。

私は2011年に『清水安三と中国』という本を出版しました。この本は、清水夫妻の帰国のところで記述が終わっていて、戦後のことにはふれていません。私自身も、桜美林学園の戦後についてはまだよく調べていません。しかし、このシンポジウムの題名は「日本の大学新生の夢——戦後期日本の教育改革、占領政策、そしてキリスト教宣教団体」というのですから、戦後のことにまったくふれないわけにはいかないと思い、少しだけお話しさせていただきます。

1946年3月に帰国した清水夫妻は、3月22日に東京に到着し、文部省に学校の認可申請を出し、何と5月5日に桜美林学園（高等女学校／英文専攻科）が開校の運びとなる。たいへんなスピードです。いろいろ事情はあるとしても、これは学校の新設ではなく、北京にあった崇貞学園の移転とみなされたということだったと思われます。しかし、学校名は変えました。学校の名前を考えているとき、そこに桜が美しく咲いていた。そこで、Oberlinをもじった上に、桜が美しいという漢字を使って学校名にしたというわけです。

それはともかく、桜美林学園は、女学校として出発しました。学園の初代理事長は賀川豊彦でした。清水郁子は、戦前から男女共学論を唱えていましたが、桜美林は男女共学でなく、女学校だったのです。

清水郁子は1931年に『男女共学論』を出版していましたので、GHQが着目し、日本における男女共学の推進のため、郁子はGHQで働くよう求められたとのことですが、彼女はその要請に応ずるよりも桜美林学園のために働く道を選びました。

桜美林も当初は男女共学ではなかったと申しましたが、清水畏三氏（安三・次男）にうかがったところでは、賀川理事長が共学に強く反対したからだとのことでした。

まもなく賀川は理事長を退き、桜美林もほどなく男女共学の学校になります。とはいえ、北京時代とちがって、寄付金の集まり具合ははかばかしくなく、学校経営はなかなか苦しい時代が続いたようです。

桜美林学園は、町田街道沿いに位置していますが、ここは、横須賀から横田基地への途上に位置しています。厚木基地も遠くはありません。今年の8月末に倉庫の爆発事故のあったアメリカ軍の相模原補給廠も、すぐ近くにありますが、年配の方はご記憶かもしれません。この相模原補給廠は、ベトナム戦争当時には戦車などの補修・整備をする場所になっていて、1972年には大いに政治的な注目を浴びたところです。

その事件のことはともかくとして、米軍による日本占領時代には、軍人たちの乗った車が桜美林の近くをよく通ったのだと思いますが、当時は農村だったその場所に教会があったわけですから、アメリカ人の目を引くこともあったと思われます。軍に所属していた牧師が、桜美林学園のために寄付をしてくれて、それによって土地を買うということもありました。現在、桜美林大学にはサレンバーガー館という名前の建物がありますが、それはこの寄付をしてくれたSullenbergerという人物に由来するものです。

その後、1950年に桜美林短大（英語英米文学科）が、そして1966年に桜美林大学（英語英米文学科／中国語中国文学科）の設置認可申請が認められました。来年は、大学の誕生からちょうど50年、半世紀となります。清水安三は、新島襄のように自分も大学創設を夢見ていた。それがかなえられたときに詠んだとされる歌が学内の石碑に残っています。「大学設立こそは少き日^{わか}に新島襄にうけし夢かも」というのです。

桜美林学園は、北京における崇貞学園の理念を継承しようとしています。簡単にいえば、「キリスト教主義の教育によって、国際的人物を育成する」こと、とうたっています。ここ

で国際性というのは、北京の貧民街に貧しい家庭の女子児童の教育をめざす学校を営んだという点にみられる国際性（つまり、中・満・日・朝の子どもたちへの教育という意味での国際性）に関連し、アメリカの Oberlin 大学で民族差別を受けなかったという清水安三の体験を背景とする国際性に関連します。

現在、桜美林大学では、日本語・英語以外に一七カ国語、ヨーロッパの諸語や中国語・朝鮮語はもとより、アジアの言語では、アラビア語、インドネシア語、カンボジア語、タイ語、ビルマ語、ベトナム語、モンゴル語の授業を設けています。これも、創立者・清水安三の考えに基づくものと位置づけられています。

また、先ほどお話しした日中戦争開始時における清水安三の北京における活動をふまえ、「パシフィスト精神」ということも「建学の精神」だとしています。

創設者の清水安三が愛好した聖書のことばがいくつかあります。

ひとつは、「せんかた尽くれども、希望を失わず」（コリントの信徒への手紙 II、四章）です。これは現行の新共同訳とは訳文が異なっています。この言葉は、中国での伝道をこころざし、さまざまな困難に直面したが、貧しい人びとに教育を授けたいという希望はもち続けたという清水の生き方と重なります。より現実的にいいますと、もっと寄付をいただきたいという希望をもつと、実現するものだという意味かもしれません。

もうひとつは、「幻」です。このことばは、旧約聖書・箴言（29 章）のなかでは、「幻なければ民滅ぶ」といわれています。これも現行の新共同訳とは訳文が異なりますが、この場合の「幻」とは、いちおう「理念」¹⁾と考えておきます。

大学には創設者の理念は継承されているはずですが、学校が大規模化してきますと、その理念がどこまで学生に浸透するか、なかなか難しいところがあるでしょう。しかし、創立者の「幻」を思い起こし、強く自覚することが大切なのだらうと思います。

註

- 1) 松尾尊兌「日本組合基督教会の朝鮮伝道」、松尾『民本主義と帝国主義』（みすず書房、1998 年）所収。
- 2) 宇都宮太郎関係資料研究会編『日本陸軍とアジア政策 陸軍大将宇都宮太郎日記 3』岩波書店、2007 年。なお、自民党代議士だった宇都宮徳馬は、宇都宮太郎の息子である。
- 3) 湯浅治郎（1890 年の第一回総選挙で群馬県選出の国会議員・自由党）と吉野作造の関わりの始まりは、吉野の満韓視察談を読んだ湯浅が吉野を訪ねたことだったと吉野は回想している。『吉野日記』1932 年 9 月 22 日条（『吉野作造選集 15』岩波書店、1996 年）。なお、ここに「満韓視察談」というのは、吉野「満韓を視察して」（『中央公論』1916 年 6 月）を指しているかと思われるが、吉野「満韓旅行の感想——日本宗教家の奮起を望む」（『基督教世界』1916 年 6 月、1704 号）かもしれない。
また、「吉野〔作造〕博士の書翰」という記事が、『上毛教界月報』（1919 年 11 月 15 日）に掲載

されている。その書翰のなかで吉野は、組合教会の朝鮮伝道のあり方に批判的である点で、「湯浅翁とは数年来意見を一にし来り候」と書いている。

- 4) 清水安三「排日の解剖」『大正日日新聞』1920年1月13・15・19・20日付。
- 5) 太田哲男「渋沢栄一と清水安三 日中交流史の一断面」『清水安三・郁子研究』第7号（桜美林大学、2015年3月）
- 6) 「支那を語る 賀川豊彦・清水安三対談」『週刊朝日』1939年4月16日号、参照。
- 7) 小泉郁子の著作は、『男女共学論』（新教育協会、1931年）、『明日の女性教育』（南光社、1933年）、『女性は動く』（南光社、1935年）の3冊である。
- 8) 太田哲男「北京・崇貞学園の財政事情をめぐって」『清水安三・郁子研究』第6号（桜美林大学、2014年3月）
- 9) 清水安三の主著は、『支那新人と黎明運動』『当代支那新人物』（ともに、大阪屋號書店、1924年）、『朝陽門外』（朝日新聞社、1939年）他。
- 10) 賀川の農村観については、1920年代を中心にしての論文だが、横関至「キリスト教徒賀川豊彦の革命論と日本農民組合創立」『大原社会問題研究所雑誌』421号、1993年12月、所収、参照。
- 11) 「幻」は、King James Version では vision、ルター訳では Offenbarung である。

[付記] この文章は、国際基督教大学アジア文化研究所主催のシンポジウム（2015年11月28日）での発表に加筆したものである。内容的には、太田哲男『清水安三と中国』（花伝社、2011年）に依拠している部分が少なくないことを断っておく。